

藍澤南城の『三百篇原意』について

村山敬三

一序

藍澤南城の『三百篇原意』は、既に内山知也氏の「藍澤南城の詩經學」(『詩經研究』)において紹介されている⁽¹⁾。氏は「南城の詩解釋は、彼が序文において明らかに述べているように、毛序を根底に置いて、諸家の訓詁の適切なるものを批判しつつ採ってゆき、『序と合して離れ、離れては合す』る、いわゆる折衷學の立場に立っている」と述べている。ただ、氏の解説は『三百篇原意』冒頭に載せられている「自序」に基づいたものであり、國風以下の注釋についての考察は行われていない。そこで、本稿では『三百篇原意』の注釋全體に基づいて、南城が参考にした文獻とその『毛詩』解釋について考察を行ってみたい。なお、『三百篇原意』の原文は句點で切られているだけで、返り點送り假名は附けられていない⁽²⁾。

二 南城が参考にした文献

(一) 参考にした文献

ここでは、南城がこの注釋を書くにあたってどのような文献を参照しているのかについて考えてみたい。柏崎市立圖書館には、南城の私塾である三餘堂の藏書がまとめて遺されている。『毛詩』についての藏書を記しておこう。⁽³⁾

詩經集註 寛政三年發行 八冊

詩經釋解 皆川愿伯 文化九年發行 十五冊

詩經世本古義 三十冊

詩經古註 延享四年發行 五冊

毛詩正文 片山兼山 三冊

毛詩注疏 鄭氏 二十三冊

以上六種であるが、もちろんこれがただちに南城が参考にした文献であると考えすることはできない。以下に『三百篇原意』中でどのような文献が参照されているか、調査によって確定できる主なものを挙げてみる。

① 毛詩正義 漢、毛亨傳、鄭玄箋

② 詩集傳 宋、朱熹撰

③ 詩經世本古義 明、何楷撰

④ 詩經釋解 日本 皆川淇園著

- ⑤ 毛詩名物圖說 清 徐鼎著
- ⑥ 詩經名物辨解 日本 江村如圭著
- ⑦ 九經談 日本 太田錦城著

この中で群を抜いて多く引用されているのは③『詩經世本古義』である。その回数^③は毛享傳や詩集傳などよりもはるかに多い。しかし、南城は何楷の説にもっぱら賛成しているわけではない。「附會甚だし」とか「於呼何ぞ忌憚無きの甚だしきや」など、厳しい批判もある。南城がこの書を利用するのは何楷の説を参照すること以外に、そこに豊富な記事、學説が盛り込まれていることでそれを自身の研究に生かそうとしているからだと思われる。安井小太郎は『詩經世本古義』を紹介して、「素會の甚だしき」説があるとも言っているが、「何楷は博學にして引授する所廣く、名物、訓詁各々考證する所あり」と言っている。實際、この書に基づいて多くの學説や文獻が引かれてくるようである。それは引用箇所と『詩經世本古義』とを照合することによって分かる。主要な人名を列挙してみよう。

- a 嚴粲〔詩輯〕
- b 郝敬
- c 呂祖謙
- d 歐陽脩〔詩本義〕
- e 陸佃〔埤雅〕
- f 陸璣

a 嚴粲の引用は非常に多い。その中には「世本古義」とその據り所を記している箇所がある。「詩輯」と書名が示されて^fいる箇所もある。嚴粲にかかわる引用を照合してみるとその多くが『詩經世本古義』にあることが確認できる。嚴

粲は宋の人。『詩輯』は安井小太郎によれば「呂氏讀詩記を主として、諸説を雜采して呂氏の意を發明」した書だと言う。

bの郝敬は十五箇所ほどの引用が見える。その中に「世本古義」と據り所が示されているものがある。今『詩經世本古義』にあることが確認できる引用は全體の三分の二程度であるが、何楷が一部分を省略して引用している箇所を南城は同じく省略して書いているから、『詩經世本古義』を見ながらその文を寫しているのだと分かる。郝敬は明末の人。『九經解（解）』の著作があり、その中に『毛詩原解（解）』がある。西口智也氏によれば、この書は詩序を尊重し、朱子批判の書であるが、孟子の「意を以て志を逆ふ」という解釋態度が特に重視されているとし、詩を學ぶ上で重要なのは詩篇に託された「志」を理解することであると述べられていて、これは郝敬の詩經學の根本をなしている認識だと言う。

cの呂祖謙は計十四箇所の引用が確認できるが、照合してみるとそれらはすべて『詩經世本古義』にある。呂祖謙は宋の人。その『呂氏家塾讀詩記』について、安井小太郎は「呂祖謙は朱熹の親友なるが、詩學に於ては全く相反せり。祖謙は毛鄭を固守し、隨て序を信ぜり。宋代古義學派の解説として一讀の價値あり」と言っている。『呂氏家塾讀詩記』の名は『三百篇原意』には記されていない。

dの歐陽脩については、最初の引用に「詩本義」とその書名が示されている。しかし、十箇所程度の引用箇所の多くがそのまま『詩經世本古義』に見える。その取り上げ方は「一義」としたり「鄭説より勝る」とする評價もあるが、批判も見られる。

eの陸佃は、十六箇所ほどの引用が見られ、書名を『埤雅』と示しているものがあつたり、「陸佃云」ではなく「埤雅云」となっているものもある。陸佃は宋の人で、『埤雅』は二十卷。爾雅の埤補の意だという。『詩經世本古義』中に

は陸佃の名が多く見られる。南城の引用はそれと重複しているものもかなりあるが、『詩經世本古義』の該當箇所に見えないものもあって、南城が實際に『埤雅』を見ながら引用している可能性も否定できない。

fの陸璣は七箇所ほどの引用である。その五箇所については『詩經世本古義』にあることが確認できる。ただ、その引用のいくつかは以下に記す『詩經釋解』にも見えている。その引用の在り方を見てゆくと、南城は『詩經世本古義』と『詩經釋解』の兩方を見ながら陸璣の説を引いていると感じられる。陸璣は三國吳の人。『毛詩草木鳥獸蟲魚疏』がある。以下は、また南城が参考にした文献に戻って記してゆく。

④皆川淇園の『詩經釋解』の引用は少なく、四例だけである。「或曰(云)」「舊々」などとしつつ最後に「譯解」と出典を記している。「譯解」は「釋解」でなければならぬはずで、照合すると引用箇所はやはりどれも『詩經釋解』にあるから、これは書き誤りと思われる。四例以外にも淇園の説は、出典を示さないその他の「或曰」に含まれているかもしれない。というのは、南城はこの書を常に参照していたように思われるからである。既に陸璣の説が、『詩經世本古義』と『詩經釋解』の兩方を見ながら引かれていることを述べたが、そのほかにも、たとえば姚炳ようへいの説もこの書を據り所にして引かれている。姚炳には『詩識名解』の著がある。その説は『三百篇原意』中に二十回ほどの引用があり、それらはすべて『詩經釋解』に見える。このように陸璣や姚炳に関する豊富な引用の例から、この書は南城にとって重要な参考文献であったと考えられるのである。なお、淇園の『問學舉要』も一回だけだが、卷一に「皆川願問學舉要」として引用が見える。

⑤『毛詩名物圖說』は、『三百篇原意』中で計十五箇所の引用ないし言及が見える。それらは照合しても『詩經世本古義』や『詩經釋解』には見えない。『毛詩名物圖說』は、乾隆三十六(一七七二)年「坊刻本」がある。現在の三餘堂藏書にはないが、南城はこの書を見ていたように思われる。

⑥『詩經名物辨解』は江如圭『名物辨解』として六回ほどの引用が見える。この書は享保十六（一七三一）年の刊行である。これも現在の三餘堂藏書にはないが、南城は實際にこれを見ていたのであろう。

⑦太田錦城の『九經談』は二回の引用が見え、さらに「近儒」としてもう一回の引用が確認できる。錦城説に對して南城は、たとえば周南「兔置」における「中達」「中林」の解について、「能く中達中林の喩へを解すれども、而れども猶ほ墨子を以て謬説と爲すは、何ぞや」と述べ、その他二回も錦城説を批判している。『九經談』は三餘堂藏書にもある。邦人の著作としては、皆川淇園、太田錦城以外には、伊藤東涯の『秉燭譚』の名が見えるが、引用は一回だけのようである。

以上、南城の注釋書類を中心とした文獻について見てきた。その他『三百篇原意』中に引用される文獻について見てみると、きわだつて多いのが『左傳』である。それに次ぐのが『説文』や『爾雅』であるが、その回数は『左傳』の方がはるかに多い。南城は『毛詩』の考證において常に『左傳』を参照していることが分かる。

(二) 毛傳、鄭箋、詩集傳に對する態度

さて、注釋の中身について考えてゆかねばならないが、ここでは毛傳、鄭箋、詩集傳に對する南城の態度についてだけ觸れておきたい。自序には次のように述べられている。

毛傳雖短簡、合于序說者、猶多。鄭箋附會禮文、穿鑿居多、不解得其十二。朱傳舍訓詁之舊、唯新之謀。序之合于私意者、取之、不合者、不取。肆然自放矣。

（毛傳は短簡なりと雖も、序の説に合する者、猶ほ多し。鄭箋は禮の文を附會し、穿鑿居多、其の十の一二を解し得ず。朱傳は訓詁の舊を捨て、唯だ新の謀のみ。序の私意に合する者は、之を取り、合せざる者は、取らず。肆然

として自ら放ほしよまにす。

毛傳は短簡ではあるが序の説と合うものが多く、鄭箋は禮の文を附會している。朱子は新しさだけを考えて、序は私意によって取ったり取らなかつたり自分勝手なやり方をしている、と言う。ここでは鄭箋、朱子に比して毛傳の價値を認めている。だが、この後では「後人毛鄭朱の解に従ひて、以て序の文を觀て、謂へらく其の意此のごとくに過ぎずと。是れ眼、意に隨ひて移り、白を以て黒と爲す。何ぞ其れ冤むじなるか」とあり、毛傳も鄭朱とひとまとめにして、それらよりも序の文を尊重すべきことを述べている。

三 『毛詩』解釋の方針

(一) 『毛詩』解釋の方針

『毛詩』解釋についての南城の學説はどのようなものであろうか。自序の最後の部分には、

祇今所以爲異者、詩篇之大意、必以序爲斷、而章句訓詁、取諸家之善解。蓋其爲說也、與序合而離、離而合。亦奉孟子以意逆志之教耳。

(祇今異を爲す所以の者は、詩篇の大意は、必ず序を以て斷を爲し、章句訓詁は、諸家の善解を取る。蓋し其の説を爲すや、序と合して離れ、離れて合す。亦孟子の意を以て志を逆ふの教を奉ずるのみ。)

とあり、内山氏は「三百篇原意」における詩解釋の方針と實際が述べられているとする。その「方針」とは、詩序の尊重、序と合して離れ離れて合するいわゆる「離合の解」、「意を以て志を逆ふ」の三點であることがここには示されている。なお、「祇」とは南城の名である。それでは以下に、この三點について注釋に即しながら南城の考えを見てゆ

きたい。

(二) 詩序の尊重

自序で南城は、「序の文古奥にして、細かく之を釋すれば、詩人の原意、曆曆として觀るべし」と述べている。詩人の原意が詩序によって知られるとの立場である。この著は『三百篇原意』と名づけられている。南城は片山兼山の學統を受け繼ぐいわゆる折衷派に屬するが、南城が詩の原意を探る方法は、諸家の良い點を取っていこうとするのではなく、詩序の記述を細かく吟味し、そこから詩の原意の端緒を引き出すようにたずねきわめることだと分かる。では、詩序の重要性について、南城は注釋の中ではどのように述べているのだろうか。

まず邶風「雄雉」の詩を見てみよう。「雄雉」は四章構成で、初章は「雄雉于に飛ぶ。其の羽を泄泄す。我の懐ひ、自ら伊の阻を詒せり。(雄雉于飛。泄泄其羽。我之懐矣、自詒伊阻)」である。そして、この序は「雄雉は、衛の宣公を刺るなり。淫亂にして國事を恤へず。軍旅數々起こる。大夫久しく役し、男女怨曠す。國人之を患へて是の詩を作る」である。南城はその注釋の冒頭で言う。

此詩人代婦人憂丈夫之久役、而一言不及宣公之事。序發言外之蘊者也。如無序、孰知詩人之志。

(此れ詩人、婦人に代りて丈夫の久役を憂ふれども、而れども一言も宣公の事に及ばず。序は言外の蘊を發する者なり。如し序無くんば、孰か詩人の志を知らんや。)

序は言外の奥深いものを明らかにしてくれる。もし序がなければ詩人の思いは分からないと言う。確かにこの詩には「展なり君子、實に我が心を勞す(展矣君子。實勞我心)」「百爾の君子、德行を知らず(百爾君子。不知德行)」などの言葉はあるが、序に言うような「久役」のことを知らせるものはない。まして宣公の時代だとも分からない。したがっ

て、序がなければこの詩は解釋の幅は廣がり、どのようにも解釋できることになる。南城が言うのはそれとは反對のことで、序があるから詩の背後にある政治や社會の狀況が分かり、さらに詩人が何を訴えたのかとも知られてくるということである。

次に衛風「木瓜」を見てみよう。「木瓜」は以下のような三章構成の詩である。

投我以木瓜。報之以瓊琚。匪報也。永以爲好也。

投我以木桃。報之以瓊瑤。匪報也。永以爲好也。

投我以木李。報之以瓊玖。匪報也。永以爲好也。

序は「木瓜は、齊の桓公を美むるなり。衛國狄人の敗有り。出でて漕すうに處る。齊の桓公救ひて之を封ず。之に車馬器服を遺る。衛人之を思ひ、厚く之に報いんと欲して、是の詩を作るなり」である。南城は注釋の冒頭に言う。

此篇平々讀去、則似民間贈答之辭。然詩之微言、自有如此者。如無序、孰知其意乎。

(此の篇平々として讀去すれば、則ち民間贈答の辭に似る。然れども詩の微言、自ら此のごとき者有り。如し序無くんば、孰か其の意を知らんや。)

この詩は、たとえば初章に「我に投ずるに木瓜を以てす。之に報ゆるに瓊琚を以てす。報ゆるに匪ざるなり。永く以て好みと爲すなり」とあるように、確かに「民間贈答」の詩として讀める。詩集傳が「男女相贈答するの辭」と言うのもうなずける。しかし、南城は「詩の微言、自ら此のごとき者有り」と言う。それはどういうことであろうか。南城は言う。

此篇大意、如果投玉報、非敢當報德、所以荅望外之厚意而結好也。況今日之贈、大出于望外者乎。其德實無可報答、唯庶幾永以爲好耳。

(此の篇の大意は、果投玉報のごとく、敢て當に德に報ゆべきに非ず、望外の厚意に答へて好を結ぶ所以なり。況んや今日の贈、大いに望外に出づる者をや。其の德實に報答すべき無く、唯だ永く以て好を爲さんことを庶幾こころわがふのみ。)

つまり南城の解釋は、この詩は民間贈答のことが詠われているようだが、實はその表現を借りて「望外の厚意に答えて」「永く以て好を爲さん」とする気持ちを表したものであり、それは民間の個人のことではなく、歴史上のことを背景にしたものだという考えである。そして、それは序によって知られる微言(＝奥深い言葉。すぐには分からないがすかにほめかされた精妙な言)だと言うのである。

(三) 離合の解

南城は自序の中で、「采蘋」と「小星」を例として「凡そ此等の處、先づ詩の原意に従ひて之を説けば、則ち序と相離れ、説の局を結ぶに到れば、則ち又序と相合す」と述べている。そして「小星」については、「小星の詩のごときは、使臣、途中の歎を述べて、序、之を假るに夫人と妾と命に貴賤有るを説くを以てす」と言う。この「小星」の注釋はどのようなものなのか、以下にその實際を見てみよう。「小星」は二章構成の短い篇である。

嗚彼小星。三五在東。肅肅宵征。夙夜在公。寔命不同。

嗚彼小星。維參與昴。肅肅宵征。抱衾與綯。寔命不猶。

この序は「小星は、惠、下に及ぶなり。夫人妬忌の行ひ無く、惠、賤妾に及ぶ。君に進御し、其の命に貴賤有るを知り、能く其の心を盡くす」である。南城はその初章を示した後に「この篇は出使の勞を詠うことで妾婢に命には貴賤によつて違いがあることを知らせようとしたものようだ」と言う。出使の勞を詠ったとはどのような詩なのか、次のよ

うに言う。

嘒彼小星、三五在東、是初昏時、在途所見也。嘒、毛傳微兒。蓋讀爲熒或烟。初昏日既落、而餘暉未盡。故列星之光猶微。其以爲小者、非實小也。稍及入夜、始知是大星參與昴矣。

(嘒たる彼の小星、三五東に在りとは、是れ初昏の時、途に在りて見る所なり。嘒は、毛傳は微の兒なり。蓋し讀んで熒或いは烟と爲す。初昏日既に落ちて、餘暉未だ盡きず。故に列星の光猶ほ微なり。其の以て小と爲すは、實の小に非ざるなり。稍く夜に入るに及び、始めて知る、是れ大星參與昴となるを。)

旅の途中のようすが解説されている。暮れ方日は沈んでいるが、明るさがまだ残っている。だから列星の光はまだかすかである。それを小とするのは、實際が小なのではない。次第に夜になって、始めてそれが大星の參與昴であることを知る、と言う。南城は二つの章の間に時間の経過を考えているのである。續けて言う。

言從昏及夜、戴星未舍、肅然嚴整旅裝而行。出使之勞如此。若夫朝廷列位大臣、夙興夜寐。勞則勞矣。然猶在君側、坐而謀議、〔解夙夜在公〕及深夜則安寐抱衾。〔解抱衾與櫛〕是比我出使之勞、則猶爲逸矣。然其逸與勞、皆由命之貴賤不同。我又何望哉。

(言ふところは昏より夜に及び、戴星未だ舍らず、肅然として嚴整に旅裝して行く、出使之勞此のごとし。夫の朝廷列位の大臣のごときは、夙に興き夜に寐ぬ。勞は則ち勞なり。然れども猶ほ君の側に在り、坐して謀議し、〔夙夜在公を解す〕深夜に及べば則ち安らかに寐ね衾を抱く。〔抱衾與櫛を解す〕是れ我が出使之勞に比すれば、則ち猶ほ逸と爲す。然れども其の逸と勞と、皆命の貴賤同じからざるに由る。我又何をか望まんや。)

「出使之勞」が説明されている。夕方から夜になり、星を空に見ながら泊まることもせず、間違いのないように嚴重に旅裝を整えて進んで行く、と。それに對して、朝廷列位の大臣は早く起き夜になれば寝る。仕事をしていることには

違ひはない。しかし君の側で坐つて謀議し、深夜になれば安らかに寝て布團を抱く。これは我が出使の勞に比べると、やはり逸樂である。しかし、その逸と勞とは、みな命の貴賤が違つてることによるのである。自分もこれ以上何を望んだりしようか、との解釋である。試みに、この南城の解釋によつて「小屋」を現代語譯してみよう。

かすかに瞬く小さな星が、

三つ五つと東の空に見えている。

おそれかしくみ旅装を嚴重にして進む、夜の遠征。

大臣様はお屋敷で朝廷のお仕事。

身分が違えば定めも違う。

かすかに瞬く小さな星は、

オリオンの三つ星と昂すばるなのだった。

おそれかしくみ黙々と急ぐ、夜の遠征。

大臣様は布團と寢間着でお休みなさる。

身分が違えば定めも違う。

空には三つ五つの星しか見えない。君命を受けて夜に出かける。冬の冷え切つた大氣の中でかすかに瞬く星は、彼の悲哀の心情と相照應しているようである。⁽²⁴⁾しかし、その星は二章では參と昂だと説明されている。つまり、星の瞬きは

次第に大きな光を放っている。とは言っても彼の悲哀は變わるものではないが、この自然描寫には悲哀以外の何かを感じられる。それは何だろうと考へてもうまく言葉に表せない。以上は南城の注釋による「小星」の鑑賞ということになるが、味わい深い詩である。「夙夜在公」「抱衾與裯」の解釋は別にして、この詩を臣下のことと解釋する説はほかにも見られる。

四 「意を以て志を逆ふ」

南城が言う『孟子』の「意を以て志を逆ふ」とはどのような理解の仕方なのだろうか。小雅「何人斯」の詩を見てみよう。これは「彼何人ぞ」で始まる八章構成の詩である。その第四章とそれについての南城の注は以下のようである。

彼何人斯、其爲飄風。胡不自北、胡不自南。胡逝我梁、祇攬我心。

此章以其倏忽來去喻飄風。然其實來去亦喻言耳。逝梁逝陳入門、及聞聲不見身。亦皆未必有其實、只是喻言其侵掠如盜竊也。讀者以意逆志可也。

(彼何人ぞ、其れ飄風たり。胡ぞ北よりせざる、胡ぞ南よりせざる。胡ぞ我梁に逝く、祇に我が心を攬る。

此の章其の倏忽來去を以て飄風に喩ふ。然れども其の實來去も亦喩言のみ。梁に逝き陳に逝き門に入り、聲を聞くに及べど身を見ず。亦皆未必必ずしも其の實有らず、只是れ喩へて其の侵掠すること盜竊のごときを言ふなり。讀者意を以て志を逆へて可なり。)

南城は言う。詩では、「彼」が來たかと思えばすぐに去って行く様子をつむじ風に喩えているが、その「來去」の様子もまた喩言にすぎない。また、「梁に逝き門に入り」などの描寫も必ずしも實際にあるのではない。喩えとして「彼の侵略する様子が盗みのようであることを言うのである。讀者は、詩人が何を述べたいのかを考えるのが大事で詩の言

葉をそのまま受け取らなくてもよいのだ、と。この詩の序は「何人斯は、蘇公、暴公を刺るなり。暴公、卿士と爲りて、蘇公を譖す。故に蘇公是の詩を作り、以て之を絶つ」である。南城は「彼」を暴公と捉えるのである。

四 詩人の創意

これまで見てきたように、南城は詩序を尊重しつつもその解釋においては詩序から離れて詩人の原意をさぐるうとしている。『毛詩』の詩は、表現されたその言葉どおりの意味内容を表しているものではない。一讀しただけでは詩人が訴えようとした元々のことは分かりにくい。だが、詩人の原意をつかむ手掛かりは序にあると南城は考えている。では、なぜ詩人は原意、すなわち元々自分が持っていた主題をそのとおりに述べなかつたのか。實際に表現された詩と原意との間にある差異をどう考えればよいのであろうか。それについて南城はどのように考えているのか、以下に南城の注釋を見てゆきたい。

① 虚設の辭

小雅「車牽」は五章から成る。第一章は「閒關として車の牽さす、變たる季女を思ひて逝く」で始まり、第五章の最後は「爾の新昏を觀て、以て我が心を慰せん」で終わる。賢女を求め、最後は賢女を得た喜びが詠われているようである。序は次のようになっている。

車牽。大夫刺幽王也。褒姒嫉妬、無道竝進、讒巧敗國、德澤不加於民。周人思得賢女以配君子。故作是詩也。

（車牽は、大夫、幽王を刺るなり。褒姒嫉妬し、無道竝び進み、讒巧國を敗り、德澤民に加はず。周人、賢女を

得て以て君子に配せんことを思ふ。故に是の詩を作るなり。）

南城は注釋の最後に次のように言う。

此篇專述迎賢女之事、皆虛設之辭也。舊以高岡柞薪之章、附會序所謂褻姼嫉妬無道竝進、以說之。然今詳序意、周人思得賢女以配君子。故作是詩也。是所以敘詩人之原意也。其他文唯述刺王之義、不可附會之于詩句也。

（此の篇専ら賢女を迎ふるの事を述ぶるは、皆虛設の辭なり。舊、高岡柞薪の章を以て、序の所謂褻姼嫉妬し無道竝び進むに附會し、以て之を説く。然れども今序の意を詳かにするに、周人、賢女を得て以て君子に配せんことを思ふ。故に是の詩を作るなり。是れ詩人の原意を敘ぶる所以なり。其の他の文は唯だ王を刺るの義を述ぶるのみにして、之を詩句に附會すべからざるなり。）

この篇で賢女を迎える事を述べているのは、皆虛設の辭（＝表現上假に述べた、事實ではない詩句）であるという南城の主張である。序は、文のすべてを詩句に結びつける必要はなく、「周人、賢女を得て以て君子に配せんことを思ふ」を詩人の原意として汲み取ればよいとする。この考え方は、實は既に『詩經世本古義』にも首章のあとの注で次のように述べられている。

言所以設此開關車之牽者、爲思慕彼少女之故。欲以車往迎之、使代褻姼爲后也。此虛擬之辭。曰思變、則非有其人可知。

（言ふところは此の間關車の牽を設くる所以の者は、彼の少女を思慕するが爲の故なり。車を以て之を往迎せんと欲するは、褻姼に代りて后と爲さしむるなり。此れ虛擬の辭なり。思變と曰ふは、則ち其の人有るに非ざること知るべし。）

ここでの「虛擬の辭」は、南城が言う「虛設の辭」と同じことを述べているようである。^(註)南城は當然この説を讀んで

いたであろう。そうしてみると、南城は『詩經世本古義』から諸説の参照にとどまらず、『毛詩』理解の方法についても大きな影響を受けていることが分かる。

② 趣向

召南「鵲巢」は、鳩がかさぎの巢に棲むことが詠われている詩である。南城は次のように述べている。

鳩奪鵲巢居之。然詩人之意、乃比夫人居君子室。則如鳩鵲同居然。〔略〕蓋專取鵲性巧鳩性拙爲喻耳。鵲之奔奔、鵲之疆疆、嘒嘒草蟲、趨趨阜蟲之類、異種相感。未必有其實。而詩人之趣向如此。於此篇又何容疑。

〔鳩鵲巢を奪ひ之に居る。然れども詩人の意は、乃ち夫人君子の室に居るに比す。則ち鳩鵲同居するがごとく然り。〕蓋し専ら鵲性の巧みなること鳩性の拙きことを取り喻へと爲すのみ。鵲の奔奔たる、鵲の疆疆たる、嘒嘒たる草蟲、趨趨たる阜蟲の類、異種相感ず。未だ必ずしも其の實有らず。而して詩人の趣向此のごとし。此の篇に於て又何ぞ疑ひを容れんや。

鳩が鵲の巢を奪ってそこにいるというのは、現實のことを述べているわけではなく、鳩鵲同居するように夫人が君子の室に居ることに喩えている詩人の趣向である、と言う。「鵲之奔奔、鵲之疆疆」は鄘風「鵲之奔奔」、「嘒嘒草蟲、趨趨阜蟲」は召南「草蟲」にそれぞれ見える。兩方とも必ずしも現實を詠ったものではなく、詩に興趣をもたらすための詩人の工夫だというのが南城の考えである。

③ 假託

鄭風「薤兮」は次のような二章だけの短い詩である。風が吹いて枯れ葉が落ちるといふ描寫から始まる。序は「薤兮

は、忽こゝろを刺るなり。君弱く臣強し。倡よまへて和せざるなり」である。

擘ひら兮擘兮。風其吹女。叔兮伯兮。倡豫和女。

擘ひら兮擘兮。風其漂女。叔兮伯兮。倡豫要女。

南城の注は以下のものだけで、『三百篇原意』の中でも最も短い。

是又假託男女之事、以述其諷意者也。風吹木擘、必墜落。叔伯誘己、必應諾。以喻君弱而一唯強臣之聽也。

(是又男女の事に假託して、以て其の諷意を述ぶる者なり。風木擘を吹けば、必ず墜落す。叔伯己を誘へば、必ず應諾す。以て君弱くして一に唯だ強臣にのみ之れ聽しなふに喩ふるなり。)

この詩で詠われているのは確かに男女の事で、叔でも伯でも誘う者には従うというのは詩集傳が言うように「淫女」である。もしこれが南城の言うように假託だとするなら、それは確かに諷意のための假託であり、痛烈なあてこすりの技法である。

以上見てきたことを整理してみたい。「虚設」とは、詩の原意にそって述べられた虚構である。「趣向」とは、詩に興趣をもたせるために同種の事柄を喩えとして使った工夫である。「假託」とは、他のことにかこつけて批判の意圖をはめかす技法である。つまり、詩人がその原意を詩として表す場合には、いくつかの表現技巧によってその詩句を考えていることを南城は説明しているのである。そうしてみると、表現された作品と詩人の原意との間には、詩の制作にあたってさまざまに凝らした意匠、すなわち詩人の創意があるのだとまとめられよう。

五 詩の意義

『毛詩』はどのように役に立つのか。詩の持つ意義は何なのか。この問題について、南城はどのようなことを述べているだろうか。小雅「六月」の詩を見てみよう。この詩は「周の宣王が尹吉甫に命じて玁狁けんいんを平定して周室を安泰ならしめたことを詠じたものである」^②。この篇の序は長く、「六月は、宣王北伐するなり。鹿鳴廢すれば則ち和樂缺く」以下、「小雅盡く廢せば則ち四夷交々侵して、中國微なり」^③まで續いている。その主旨は、鹿鳴では和樂、四牡では君臣、といった具合にそれぞれの篇ではその篇ごとのテーマがあつて述べられており、それらを學ぶためにこれらの篇は有用なものであるということである。南城は、初章を示したあとに、次のように述べている。

此詩序述詩道之不可缺。自鹿鳴至菁菁者莪、凡二十二詩。然後繼之曰、小雅盡廢則四夷交侵、中國微矣。然則詩道之管國政、不須言。孔子曰、詩三百一言以蔽之、曰思無邪。言誠意正心在于此也。故究詩之奧、則聖人之道、不他求。

（此の詩の序は詩道の缺くべからざるを述ぶ。鹿鳴より菁菁者莪に至るまで、凡そ二十二詩なり。然る後之に繼ぎて曰く、小雅盡く廢せば則ち四夷交々侵して、中國微なりと。然らば則ち詩道の國政を管する、言を須たず。孔子曰く、詩三百一言以て之を蔽へば、曰く思邪無しと。誠意正心此に在るを言ふなり。故に詩の奧を究むれば、則ち聖人の道、他には求めず。）

詩の持つ意義を説くについても、南城の主張の據り所は序である。この詩の序に「小雅はすべて捨て去るならば四夷は代わる代わる侵掠し、中國はわずかな領土になる」とあるのを手掛かりにして論が展開されている。詩道が國政をつ

かさどることが述べられ、さらに孔子の「思邪無し」の言葉が引かれている。詩の奥を極めることが聖人の道を學ぶことだと最後に述べられているが、同時に詩道とは誠意正心を學ぶことであるという主張もくみ取れる。高田眞治氏は「六月の詩は、王者が正々の陣を以て戎狄を伐ち攘って、遠く邊地に斥けることを述べたものであり、將帥は文武の徳を兼備し、孝友の人柄の人物にして、始めて、中國を安んじ、戎狄を服せしめることのできることを現わしている。王道の思想に基くものである」と言う。誠意正心を學んでそれを政治に生かすことは王道の思想である。

六 結語

以上見てきたところによって、本稿の結論をまとめておこう。

南城はその『三百篇原意』において、何楷の『詩經世本古義』を最も多く引用している。また、引用は少ないものの皆川淇園の『詩經釋解』もよく参照されている。南城は何楷の説を参照するだけでなく、『詩經世本古義』に盛り込まれている『毛詩』に關する豊富な記事・學説を自己の學說形成に大いに生かしている。南城の『毛詩』解釋については、詩序の尊重、離合の解、意を以て志を逆ふ、の三點がその特徴として考えられる。南城は、序には微言があり、序は詩の原意を知るために搖るぎない價值を持つものだと考えている。だが詩篇の解釋にあたっては、南城は序から離れて詩人の創意を考察し、説明している。その創意は「虚設の辭」「趣向」「假託」などの表現を使って説明されている。また南城は、序は詩道の缺くべからざることを述べているとして『毛詩』の持つ意義を説明しているが、それは王道の思想に通じる考え方である。以上の點から、『三百篇原意』は獨自の特色を備えた注釋書であると言える。

本稿は『三百篇原意』の全體について考察してみたものであるが、注釋の在り方については、詩人の創意についての

考察が中心となり、その他たとえば詩句に關する南城の考證などについては觸れられなかった。論じ足りない部分は多くあるが、今後はこの研究を土臺としてテーマを小さく狭めて考察を行ってゆきたいと考えている。

注

(1) 『詩經研究』(日本詩經學會・第八號・一九八三年)所收のこの論考では、『三百篇原意』が、南城四十九歳の時の完稿であること、新潟縣立圖書館所蔵で原稿本と淨書本があること、「第一冊は、序、(國風)周南、召南」といった各巻の内容などが最初に紹介されている。

(2) 新潟縣立圖書館の郷土文庫データベースに「藍澤南城文庫」があり、これによって『三百篇原意』も閲覧することができる。なお、本稿では淨書本を使用した。

(3) 柏崎市立圖書館「新潟縣指定有形文化財指定記念 藍澤南城展解説目錄」(一九九八年)による。

(4) 『詩經世本古義』はその次第が特異で、著者独自の部立てによって各篇が配列されている書である。ところが、柏崎市立圖書館の『詩經世本古義』を見てみると、この本は特殊な本である。中に「詩經世本古義篇次」として角部から始まる本来の『詩經世本古義』の篇次を示しているが、實際の詩篇の配列は國風から始めて葛覃、卷耳と續き、商頌の殷武で終わっている。つまり、『詩經世本古義』の配列を通常の『詩經』の配列に直して使い易くした本のようなのである。しかも、本文は句讀が切られ、ところどころ傍點が附されたところも、そのままの状態で印刷されている。書き入れは全く見られない。

(5) 安井小太郎述「經學門徑」(松雲堂書店、一九七一年)三二頁。

(6) いわゆる孫引きである。今日の論文執筆の常識とは異なり、當時はこうした引用の仕方は氣輕に行われていたように感じられる。

(7) 照合に用いたのは、『詩經世本古義』十六卷(崇禎十四年刊本の光緒十九年石印重刊本、全十六冊、筆者藏)である。

(8) 安井小太郎前掲書、二九頁。

(9) 照合に用いたのは、『毛詩原解』三十六卷(光緒十七年三餘艸堂藏板、全六冊、東京都立中央圖書館藏)である。

(10) 日本詩經學會「詩經研究」(第二十三號・一九九九年)「赫敬の詩序論—朱子批判と孔子尊重—」参照。

(11) 安井小太郎前掲書、二八頁。

- (12) 陸佃ないし埤雅としての引用は十五箇所で、そのうち『詩經世本古義』にも見えるものは九箇所で、それ以外はこの書の該當箇所には見えない。
- (13) 照合に用いたのは、皆川愿伯撰『詩經繹解』十五卷（文化九年、柏崎圖書館藏、全十五冊）、並びに筆者藏の皆川愿撰『詩經繹解』十五卷（發行年の記載はない）である。
- (14) 「能解中途中林之喻、而猶以墨子爲謬說、何也」
- (15) 「後人從毛鄭朱之解、以觀序文、謂其意不過如此。是眼隨意移、以白爲黑。何其冤乎」
- (16) 内山氏前掲論文、六頁。
- (17) 「序文古奧、細繹之、詩人之原意、歷歷可觀焉」
- (18) 「雄雉、刺衛宣公也。淫亂不恤國事。軍旅數起。大夫久役、男女怨曠。國人患之而作是詩」
- (19) 「木瓜、美齊桓公也。衛國有狄人之敗。出處于漕。齊桓公救而封之。遺之車馬器服焉。衛人思之、欲厚報之、而作是詩也」
- (20) 「凡此等處、先從詩之原意說之、則與序相離、說到結局、則又與序相合」
- (21) 「如小星詩、述使臣途中之歎、而序假之以說夫人與妾命有貴賤」
- (22) 「小星、惠及下也。夫人無妬忌之行、惠及賤妾。進御於君、知其命有貴賤、能盡其心矣」
- (23) 「此篇似賦出使之勞使妾婢知命有貴賤不同者」
- (24) 村山吉廣氏「召南『小星』小解」（日本詩經學會『詩經研究』第三六號・二〇一四年）にも、「明るい月が取合されてなく、見上げる天の果てに小さな星のかけらが頼りなげに光を放っているのは作者の心の悲哀のためである」とある（三三頁）。
- (25) たとえば姚際恆の『詩經通論』卷二に「此篇章俊卿以爲小臣行役之作、是也。今推廣其意言之」とある。この説については、村山吉廣氏前掲論文、「召南『小星』小解」に詳しい。なお、王靜芝著『詩經通釋』も「此行役之人、自咏其勞苦而無怨之詩」、陳子展撰述『詩經直解』も「今按、小星、當是小臣行役自傷勞苦之詩」としている。
- (26) 「何人斯、蘇公刺暴公也。暴公爲卿士而譖蘇公焉。故蘇公作是詩、以絕之」
- (27) 南城の見解はまた、清の胡承珙の解釋と同じである。胡承珙は「序云、周人思得賢女以配君子。首章即云、思變季女逝兮。是全篇皆虛擬之詞、並無其人其事。〔序に云ふ、周人賢女を得て以て君子に配せんことを思ふと。首章に即ち云ふ、變たる季女を思ひて逝くと。是れ全篇皆虛擬の詞にして、並びに其の人其の事無し。〕」と言う（『毛詩後箋』卷二十一）。胡承珙の説は高田眞治『詩經』下（集英社、漢詩大系2、一九六八年）、二七〇頁に紹介されている。

- (28) 「籜兮、刺忽也。君弱臣強。不倡而和也」
- (29) 高田氏、前掲書下八四頁。
- (30) 「六月、宣王北伐也。鹿鳴廢則和樂缺矣」〔小雅盡廢則四夷交侵。中國微矣〕
- (31) 高田氏、前掲書下、八五頁。